真宗の学場への祈願

寺川俊昭

一

今日は六月六日ですから、ご承知のとおり清沢満之先生のご命日に当たる日です。この日に、ここにお集りくださいました皆様と一緒に、清沢先生の学恩を憶い、またご一生のご苦労を偲ぶことであります。ことに今、広瀬先生からご挨拶がありましたように、清沢先生を初代学監としているこの大谷大学で臘扇忌を勤めることを思います時、心改まる思いがすることであります。同時に、この臘扇忌を勤めるに当たって、多くの有志の方が心をこめて準備をしてくださったことでありまして、そのことに対しまして改めてお礼申し上げることであります。

ご存知のように、清沢先生が亡くなられたのは明治三十六年ですが、その二年ほど前の明治三十四年、この年は一九〇一年ですから二十世紀の始まる年ですが、その年の秋、京都にあった真宗大学寮を東京に移転して、新たな構想のもとに再出発する、こういう仕事を先生は果たしておられます。いうならば、形は当時の国家の制度でいえば専門学校令による学校ですけれども、清沢先生の抱負としては、大学という水準において仏教を研究するといいましょうか、もう少し積極的にいえば仏道を学ぶ、こういう願いをもった学場を開きたい、こういう志願の実行ですね。そういう抱負を託して、しかも近代の大学という体裁をとりながら、一つの学場をしかも東京という地に開くという、歴

史的な意味を感ずる一つの仕事を果たされたのであります。

その真宗大学について、実は早く昭和三十二年頃、大谷派の教化研究所で『清沢満之の研究』という仕事をした中で、広瀬先生が「真宗大学」という題で、清沢先生の今申しあげている真宗大学の開設、すなわち東京に浄土真宗の学場を開くという、このお仕事の歴史的な意味を、もちろん当時の状況をたどりながら、そこに託された願いと、またそこで先生が立とうとなさった仏道の学びの精神について、非常に丁寧で緻密なご研究を公にしてくださっております。ですから改めてこれをよく読んでいただければ幸いでございます。

実は私も改めて読みまして、三十年あまり前のことですが、私もこの研究チームに加えていただいて、清沢先生の教団改革運動を担当しておりましたので、広瀬先生ともご一緒に、いろんなことを語り合いながら清沢先生のお仕事を尋ねていった当時を、改めて思い起こしていたことでした。それで、少し雑談をお許しいただきたいのです。

その頃は、曾我量深先生や金子大栄先生がお元気な時でした。あるいは松原祐善先生も執筆を担当なさっておりましたが、そういう方々の前で、私たちは何度か中間発表をしなければなりませんでした。それはまるでお釈迦様の前で説法をせよというようなもので、もうほとんど冷汗三斗の思いでした。しかし今思い出せば、大変懐しうございます。私は清沢先生の宗門改革運動の研究、これを課せられておりましたのですが、中間報告の時にその要点を報告いたしましたら、曾我先生は「まあ、そんなもんでしょう」、こういわれました。「まあ、そんなもんでしょう」というのは、その程度のことしか、お前は考えていないのかという意味にもとれますが、まあそんなことを考えているとすれば、大体いいだろうとおっしゃったともとれます。私は後者の意味にとりまして、曾我先生から「まあ、そんなもんだろう」といわれたとすれば、もって瞑すべきであろうかと、ひそかに安堵の思いをもったことでした。金子先生は、「報告されたところまでは一応分かる。しかしそのあとが聞きたい」、こうおっしゃいました。「そのあと」は、しばらく時は経ちましたが、自分の心算ではその後書いた『清沢満之論』で、金子先生が「そのあと」とおっしゃっ

て下さったそれを思いながら、書いた心算でおります。ともあれ、お二人の大切な先生のお励ましが、三十年経った今でも彷彿と感ぜられてくるのでありまして、そういう意味でも大切な勉強の機会をいただいたという思いが、今でも強うございます。その『清沢満之の研究』の中で、広瀬先生がお書きになった「真宗大学」は非常に立派な研究でありますので、われわれが学ぶこの大学が、どのような志願のもとに開かれた大学であるかは、私たちが共通に是非とも問うべきことでありますから、よくお読みいただけば幸いと存じます。

二

清沢先生が亡くなられたのは、明治三十六年六月六日でした。六月六日と申しましても、先生が命終えられたのは六月六日の夜中、つまり六月五日が終った直後の十二時半頃だったのです。私は昨夜十時頃、ああもう少し経った頃、先生は命終なさったのかと思いながら、今日お話しすることのノートを作っておりました。そしてしきりに、清沢満之という尊敬おく能わざる一人の人間が命終っていかれたその時の有様を、改めて思っていたことであります。

それについては細かい記録が残っておりまして、先生の晩年に身のまわりのお世話をなさったお方が、『終焉日記』をお残しになっております。もし皆様が三河大浜の西方寺にお参りなさいますと、先生が療養され、そして亡くなっていかれた部屋が、今も保存されているはずです。やや薄暗い部屋であったように記憶していますが、そこで四十年に少し足らない短い人生を、清沢先生は終えていかれました。その光景が、改めてしきりに思われてならないことであります。

あれは明治三十六年の五月二十九日の日記ですが、そこに先生は次のような重い実感を記しておいでになります。

本日快鬱。特に他人の行為の少しく憍傲なるものを我に対する大なる圧迫と感じ、憤懣的苦悶に堪えず。而して之を客観妄と知ると雖も、其情的快鬱は容易に消却せず。終に前に記せる生活無趣味の感と合して殆んど厭世的

思案に沈まんとす。

しかしながらこの重い心境の中で、先生はその信境を、「我は此の如く如来を信ず」という題のもとに、信念の実感そのままを正直にそして卒直に表白していかれました。しかも文章も敢えて口語を使って、自分の信念のありったけを書き綴っていかれました。それを東京の浩々洞に郵送なさったあと、月が改まって六月になりますが、それでなくても弱っておられた先生のお身体が、にわかに状態が悪くなり、三日、四日と二日続いて大喀血が起きました。百五十グラムとありますから、牛乳瓶一本に近いほどの量の喀血です。おそらく洗面器に一杯になるような感じだったと思いますが、この大きな喀血によって、先生はがっくりと弱っていかれます。三日に大きな喀血があったあと、周りの人々は大きな喀血があると一度で終らないで、同じような喀血がもう一度あると聞いておられたのでしょう、非常に注意をなさっていたら、翌四日に再び、午前十時頃大喀血がありました。前日と同じように、百五十グラムほどの血を吐かれ、熱も四十度近くに上がっておられます。あまり生々しく想像し過ぎてはいけませんけれども、寝ておられたか座っておられたか分かりませんが、がばっと血を吐かれるでしょう。傍の人が手拭いで拭うて差上げられたでしょうが、辺りは血だらけだ、こう思うておくべきです。それで、お世話をなさっていた原子さんが、「先生、もう駄目です。先生の命もこれで終りではないかと思う。何かいい残すことはありませんか」、こう尋ねたのですね。そしたら先生は一言、「何もない」、こういわれた。四日の日は、まだ二椀のお粥をいただかれたのですが、五日になりますと、スープを一椀、少しお飲みになっただけで、大変苦しそうでした。仰むけに寝ているのが苦しいので、布団の上にお座りになる。おそらく肩で息をされる状態だったのでしょう。それがまた苦しいので、布団にもたれて喘いでおられたが、また横になる。

臥して苦しげに、坐して苦しげに見ゆ。前に小机を置き、これにもたれて俯きおわせしが、ややありてまた臥し給う。いかにするも身体の持ち悪くそうに見えたり。

こういう状態が一日続き、その夜中に命終えられたのです。その最後の、十二時半頃、病状が悪いというので原子さんが部屋に行ってみたら、先生は苦しそうに肩で息をして喘いでおられました。その先生が、妹さんと原子さんとお二人の顔をじっと見ながら、「苦笑しつつ呼吸絶えぬ」。先生の最後は、こう伝えられております。苦笑しながら息が止まった、これが清沢先生の肉身の最後の光景です。

私はずっと以前に、清沢先生は「苦笑しつつ呼吸絶えぬ」と書いてあるのを読みまして、「苦笑しつつ」というのはどういうことだったのか、何となく気にかかっていたのです。ところが、自分の両親の死に遇うてみまして、成程と分かった思いがいたしました。これは、先生は「にっこり笑うて息絶えられた」のだ、こう読むべき言葉なのですね。先生はにっこり笑うて、自分は為すべきことは為し終えることができた、この満足の思いの中で命終えられたのです。私はふと、「所作已に弁じ」という古い言葉を思い起こすのですが、そのとおりでありまして、先生の一生、いわゆる霊的奮闘の一生を一言でいい表わすならば、先生自身が語られたように、「天命に安んじて人事を尽くす」、この一生だったでしょう。その人事を尽くし終った、すなわち自分は無智無能の者であったけれども、天命に安んずることのできた恩恵として、無智無能の全身をひっさげて、なすべきことをなし終えさせていただくことができた。こういうような思いで、にっこり笑われた筈なのです。ただ、肉体が喀血につぐ喀血で弱り果て、苦痛にせめられているために、傍から見ると、にっこり笑われたその表情が苦笑と見えたのであろうかと思うのです。しかし先生は苦笑なさったのではなくて、にっこり笑うて息絶えたに違いありません。清沢先生の終焉記を読みまして、いかにも見事な死にざまだという感銘を、私はひそかにもっていることでございます。

もしこのような了解が許されるとすれば、先生の一生は満四十年に少し足らないという、大変短い人生でありましたが、その四十年の命をひっさげて、なすべきことというに値する仕事を、先生は果たし遂げていかれました。「天命に安んじて人事を尽くす」、こう先生は語られましたが、人事というのは人生の一大事ということでしょう。一人

の男が、自分の人生をかけてなすに値する仕事を自覚し恵まれて、力を尽くしてそれを果たしていった。こういう、深い感銘をもたずしては見ることのできない人生であったことが、私には思われてならないのです。

三

清沢先生を改めて尋ねてみますと、実はすべての仏教者がそうであるというべきですが、先生の中には燃えるような情熱の火があったと思います。火のように燃える情熱、もし仏教の言葉でそれをいえば志願というべきものが、激しく動いておりました。先生の果たし遂げていかれた仕事を思い直してみる時に、ただ一つのこと、あれやこれやではなくてただ一つのこと、これを先生は渾身の情熱を集中して果たし遂げようとし、そしてそこで命の火を燃やしていかれたことを知るのです。それを一言でいえば、仏教復興の志願でありました。そしてこの一事こそ、「天命に安んじて人事を尽くす」といわれたその人事、すなわち人生の一大事であり、「命百千ありても猶足りぬ」と語られた、一人の仏教者としての清沢先生が、渾身の力を挙げて行じていかれた仏事であったのです。

ちょうど親鸞聖人が法然上人を「真宗興隆の大祖」と仰いでいかれたように、私は清沢先生を仏教復興の志願に生きた仏者と、仰いでいきたいのです。考えてみますと清沢先生については、さまざまな像、いわゆる清沢像とでもいうべきものが画かれておりまして、何か非常に内省的な人と理解されることがしばしばであるように思われます。もちろん先生は内観・自己省察ということを、こよなく大切になさっておりますから、そういう清沢像も当然の、ある意味で正しい了解だと思います。しかし何かこう、外へ眼を向けるのではなくて、自分の内に閉じこもっていった人というような清沢理解がもたれることもあるかも知れませんけれども、私はそうではなくて、仏教者の自覚の痛みに立って、仏教復興の志願を感得し、それを果たしていくところに自分の人生の事、人生の一大事を自覚し覚悟して生きた人、こう了解するのです。

この点からいいますと、清沢満之という人は、明治仏教を背負って立った志士の面影を湛えた人です。明治仏教を背負って立つ、そういう気慨に満ちた志士です。去る四日に鹿児島で臙扇忌が勤まりまして、私も伺ったのですが、維新の折に薩摩の先輩たちが「勤王の志士」などと呼ばれて、明治という国家の形成に奮闘したが、清沢先生もそのように大きな危機の中にあった明治仏教を背負って立った志士だと申し上げていたのです。そしたらさすが鹿児島でありまして、やはり古武士然としたお年寄の方がおいでしたが、大いに共感してくださり、「よう分かる」とおっしゃってくださいまして、面白うございました。

例えば清沢先生が三十四歳の頃、明治二十九年の秋でしたが、先生は一人の大谷派の宗門人として、大谷派の現状見るに忍びずというので、同志あい謀っていわゆる大谷派事務革新の運動を提起なさいました。その時に改革派の機関誌として発刊されたのが、ご存知の『教界時言』です。その創刊第一号に、「教界時言発行の趣旨」と題された文章があります。少し清沢先生に関心のある方であれば、当然お読みになっているかと思いますが、そこで先生は随分と高い調子で、何故いま大谷派宗門の寺務・運営を改革しなければならないかということを、訴えておいでになります。そこにはやはり、気鋭な明治の文学士の風貌が輝いております。眼をあげて世界を見よ。長い歴史をもつ東洋の文化と、これまた非常に大きな意味をもつ西洋の文化と、人類の歴史を培ったこの二つの偉大なる伝統が、今この明治の日本において、歴史的な出遇いを遂げつつある。そこには一面混沌とした混乱状態も現出しているけれども、他面何か鬱勃として新しい文化を生み出そうとする動きが、その胎動を始めている。その中にあってわれわれ日本人は、この東洋の伝統に立ちながら、さらに西洋の伝統に自己を教えられ自己を鍛えながら、新しい世界的統一的文化を創造していかなければならない。ほぼこういうことを、まず述べてあるのです。その言や壮なるものがありまして、さすがに明治の文学士だというものが感ぜられて、大変愉快です。その中にあってわれわれは今、真宗大谷派という宗門の改革を社会に訴えるのであるけれども、しかしこのことを自分は決して小さなこととは考えていないのだ。もと

よりわれわれは今述べた世界的統一的文化の創造に参加する、こういう課題を十分に自覚しているのであるけれども、事には順序がある。だからもし国家を論ぜよといわれれば、一人の国民として語らないわけではない。世界を論ぜよと求められれば、一人の人間として語らないわけではない。しかしながら今、自分が最大の急務としているのは、現代日本の最大の教化団体である真宗大谷派の現状を憂え、自分が所属して最も大きな責任を感ずるこの宗門の改革をめざして、見解を提起することである。

こうして先生は、さらに論議を進めていかれます。そもそも真宗大谷派という宗門は、一体何のためにこの世に在るのであるか。それはただ一つ、「余輩のよってもって自己の安心を求め、よってもって同胞の安心を求め、よってもって世界人類の安心を求めんと期するところの源泉」であること、つまり個々の人間の、民族の、そして人類の宗教的信念を確立する場であることである。このような大きな天職すなわち個有の使命を、大谷派宗門はもっているのである。こういう社会的使命の自覚を、先生は強く訴えていたのです。ところがその宗門の現状が、見るに堪えない。要するに、その天職というべき職責を全うできていない。そのために、敢えて天下に改革を訴えるのである。「教界時言発行の趣旨」には、ほぼこんなことが書かれております。大いに元気を感じさせる、士気を鼓舞するような論述であります。

一体清沢先生という方は、非常に厳粛な姿勢の方であり、いわゆる倫理的リゴリズムに徹した人でした。あるいは儒教的な厳粛主義、こういう資質を豊かにおもちになっていた方ですが、同時に明治人独特の非常に大らかな、むしろユーモラスな気質さえあった人です。ですから、清沢先生を過度に厳しさだけで見るのは適切ではなく、大変大らかな人であったというべきです。西谷啓治先生は、清沢満之という人は非常にすぐれた資質をもっている仏教者であるが、その第一の面目は非常にまじめな求道心に生きた人という点にあると語っておいでになります。これはもう、誰しも認めるところでしょう。第二に気宇広大、眼を挙げて世界を見るという気慨で、いわば世界史的な視野に立っ

てものを考えた人である。こういう西谷先生の清沢理解は、大いに私たちに大切なものを問いかけているように思います。

それで想い起こすのですが、親鸞聖人が例えば「印度・西天の論家、中夏・日域の高僧」といい、「西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり」と、眼を挙げて十方衆生を見よ、印度の、西域の、中国のそして日本の、そこに生きて苦悩する衆生を見よ、そしてそこに流伝して、この苦悩する衆生に大悲の世界を開示した教言を聞けと、非常に気宇広大な世界史的な眼をもって、本願の仏道の真理性を顕揚なさっております。状況は随分違いますけれども、その青年期に大学で自己形成をしていく時に、ヨーロッパの近代の思想を学び取り、ヨーロッパの近世・近代を形成した偉大な思想家たちの思想に本格的に触れつつ、清沢先生は自己を形成していかれました。そういう遇々恵まれたものを十分に生かしながら、今清沢先生は日本仏教の一宗派である真宗大谷派の社会的使命を自覚的に語る時に、きわめて広い視野で宗門個有の社会的使命を明確にしようとしたのです。私はそこに、大いに学ぶべきものを感ずることであります。

四

このようにして、仏教復興という大きな志願を感得して、そこに自らの生涯を捧げ燃焼していった人、こういう清沢先生が私には見えてならないのです。そしてこの仏教復興の志願を実践すべく、先生は幾つかの仕事に取り組んでいかれました。ところがこのことを通して先生は、先生のもう一つの側面というべき一個の凡夫、安田理深先生の言葉でいえば「完全円満な凡夫」として五濁悪世に投げ出されて生きるもの、こういう姿を今更のようにさらけ出していったのです。仏教復興の志願に立った志士の俤、完全円満な凡夫をさらけ出した迷悶者、そのどちらも、一度びそれに触れたならば、われわれの心をとらえて離さない、清沢先生の本領ではないでしょうか。

先生の浩々洞時代の講話に、ご存知のように「迷悶者の安慰」と題されたものがあります。この講話がなされた事情については、ある研究者によりますと、一人の社会主義者の臨終と関係があるようです。その人の臨終に、あの釈雲照師がいわゆる臨終行儀をしたとかしないとかのことが、当時新聞に報ぜられまして、それをめぐっていろいろと是非の論が喧しかったようですが、それを清沢先生もご存知であり、それをどこかで思いながらこの講話をなさったようです。その中で先生は、「宗教は迷悶せるものに安慰を与うるものなり。迷悶なきものには、宗教は無用なるものなり」と述べておいでになります。それを語られた事情は事情として、浩々洞時代のことですから亡くなる数年前に、たまたま先生は迷悶する者、こういう言葉を語られた。それを聞く時、私は先生の絶唱ともいうべき「他力の救済」の中にある言葉を、併せて思い出すのです。「迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安楽の浄土に入らしむるが如し」。迷倒苦悶の娑婆とは、五濁悪世のことでしょう。これが清沢先生が生きて、生きることに苦んだ世界です。この迷倒苦悶の娑婆に投げ出されて、そこで自分が一人の人間として仏教者として果たし遂げていきたいと願った仕事、それに全力を尽くして取り組んで、しかしながらいかに自分が無智無能であり、力弱いものであるかということを、繰り返し繰り返し痛いほど思い知った。だからといって、清沢先生はあの仏教復興の志願を決して放棄することはなかったのです。この事実をこそ、私たちは注意すべきではないでしょうか。

一人の人間として、背負うに堪えられないほどの重い仕事、その中で途方に暮れることもしばしばであった。「我は此の如く如来を信ず」の中で先生は、自分は数限りない義務・責任のために、遂に不可能の敷きに突き当たってしまった。もし最後までそれをやり遂げよといわれたら、自分は自殺するほかはなかったと述懐なさっております。しかし逆にいえば、そういう天職すなわち自分の運命が敢えて意欲した使命、それに力を尽くして取り組んで悪戦苦闘した清沢先生が、思われてならないのです。

その中で疲れ果てた自分が本当に求めるもの、今日の臘扇忌でお読みになった文章でいえば、「人心の至奥より出

ずる至盛の要求」ですね。われわれの魂の奥底から滲み出る止むに止まれぬ要求、それはただ一つ、安慰が欲しい、この一事だと思います。安慰という時、慰めより安らぎの方に力点がかかっているのでしょう。とにかく安慰を切実に求めずにはおられないところへ、先生は追いやられていっているということが、どうも私の心に響いてならないのです。安慰といいますと、これを強調して「大安慰」といえば、これは阿弥陀如来の別号の一つなのですから、親鸞聖人が「大安慰を帰命せよ」とおっしゃったその自覚を、先生もまた模索なさっているという風情が感ぜられてまいります。

一人の迷悶者として、私は生きるほかはない。自分は煩悩のために人生に迷い、苦悶する。その自分に動いて止まない魂の祈求、それはただ一つ、安慰が欲しい、この一事である。これは大変よく分かる、先生の要求でありました。このことについて、われわれは思うべきです。それは慰めというより安らぎという点に注意すべきだと申し上げた、そのことなのです。清沢先生はご承知のとおり、何故お前は如来を信ずるというようなことをするのかという問に対して、自分は如来を信ぜずしては、「生きてもおられず、死んで往くこともできない」、こう語っておられますね。実はこう白状なさるその状況なのですが、清沢先生に個有のこの迷悶の痛みの白状は、さまざまの業縁で動く中で生きることに苦しんだというある意味で消極的な、受け身の苦悶に終始しているのではないことに、注意したいと思うのです。そうではなくて、力を尽くして一つの志願を行じようとしたから、先生の人生は苦悶の中に突入したのだ、こういう趣き、いわば苦悶を戦い取ったというような趣きがあるのです。もう少し平凡に生きたら、一人の東京大学教授というようなところに安んじておられたら、肺結核にもならずにすんだでしょうし、もう少し平穏な人生にも恵まれたかも知れません。しかし先生に動いた大菩提心、あるいは一人の真宗の僧侶としての責任感が、先生をして仏教復興の志願のもとに生きるものとし、その志願を実行する努力が先生をして迷悶者たらしめたといいましょうか、深い迷悶の痛みに逢着せしめた。こういう非常に積極的な迷悶者という風情が、私にはしきりに思われてならないので

す。

「我は此の如く如来を信ず」の中に、如来は私に対する無限の智慧だということをお述べになるところがありますが、そこに、

人生の事に真面目でなかりし間は措いていわず、少しく真面目になり来りてからは、どうも人生の意義について研究せずにはいられないことになり、その研究が遂に人生の意義は不可解であるという所に到達して、ここに如来を信ずるということを惹起したのであります。

という、よく知られた述懐があります。ここにいわれている「人生の事」とは何であろうか、これは考えてみなければならないと私は思うのです。それは人生の百般の事、人生の凡ゆる事柄、要するに生きることに真剣になるということですけれども、先生が「人生の事」とおっしゃる時、もっと積極的な意味があったに違いないのです。そもそも清沢先生の一生を一言でいえば、前にも申し上げたとおり、「天命に安んじて人事を尽くす」といわれた、そういう生涯でしょう。ここにも語られている「人事」すなわち「人生の事」とは、一体何であったのでしょうか。それこそ前に申し上げた「人生の一大事」、一人のまじめな仏教者清沢満之に動いた、仏教復興の志願そのものです。

ですからこの仏教復興の使命の自覚に触れないで、人間として社会的な栄達や名利を望むようなことが主要な関心事である間は、まあ話にならない。

パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり。

と先生は述べておりますが、こういう関心に自分が立っていることは否定できないけれども、それが自分の最大関心であるならば話にならない。けれども「少しく真面目になり来りてからは」というそこにある甚深の含蓄を、われわれは聞き取るべきだと思うのです。それを私は繰り返し申しますように、仏教復興の志願への目覚めと了解するのです。

仏教復興と申しておりますが、復興と敢えていうのは、衰えている、滅びに向かっている、こういう認識と痛みがあるからこそ、復興をいうのです。考えてみますと、清沢先生はやはりすぐれた資質に恵まれた方でして、非常な気宇広大さ、強靱な意志と思索力、敏感な感受性、こういう天からの賜物であるすぐれた資質を十分にもたれた、代表的日本人の一人だという感が強くいたします。そんな清沢先生に向かって立ってごらんなさい、どれほど自分が小さく、みすぼらしいか、否応なく感ずるでしょう。橋本峰雄先生は、「とてもかなわない人」という言葉で、先生に対する大きな尊敬を述懐なさっています。その清沢先生に、仏教復興の志願がふと動いた。動いた清沢先生には、一人の真宗の僧侶であるという自覚が、強くもたれていた、これはやはりとっても大事なことではないでしょうか。身は「俗家に生まれ」、しかも貧しかった。しかし少年満之は、勉強がしたかった。その向学心に動かされて、先生は僧籍を得たのです。しかし一人の真宗の僧侶となった限り、まじめな僧侶でなければならない。こういうある意味で大変に人間臭いまじめさが、清沢先生の菩提心を磨いていったのだと思います。

その清沢先生の眼にうつった日本仏教の現状、それは多くの方がご指摘になっておりますように、危機という言葉で表わすほかはないような状況であったのでしょう。排仏毀釈以来のさまざまな社会的事情によって、仏教の「宗教的生命はなお存するか」と問わざるを得ないような、惨憺たる状態を明治仏教はさらけ出していると明治仏教が見え、そしてそこから眼をそらすことができなかったというのが、仏教者清沢満之のまじめさであり痛みであったのです。先日ある先輩と話しておりました時、今の真宗寺院が経済的に恵まれているのは史上空前ではないかと、感想を洩らしておられましたが、私たちの寺へ帰っての生活をちょっと思い出してごらんなさい。真宗のお寺の家庭での生活がこんなに恵まれたことは、歴史上かつてなかったのです。そういうものは見えても、真宗の宗教的生命はなお存するかというて、わが寺を、わが宗門を、そして日本仏教を見るこの関心が、私たちにどれほど摩耗していることか。このことを先生から改めて問われる思いがいたします。

先生が西方寺に入寺なさって間もない頃、あれは明治二十四年でありましたが、いわゆる濃尾大地震が名古屋地方を襲いましたでしょう。沢山のお寺が、この地震によって壊れたのですが、もちろんほどなく、多くの人びとが協力して地震で倒壊し、傷んだお寺の再建・修復を行います。そして立派に再興されたお寺で落慶法要が続くのですけれども、そこへ住職や僧侶たちが、新調の装束を着けて出席いたします。清沢先生はそれを繰り返し見ながら、役者でもあるまいに、何故あんな装束のきらびやかさを競うのか、こういう一種の憤懣を、養父に宛てた手紙で何回かもらしています。儀式のきらびやかさを競うために、大谷派があるのではないだろう。さらにお寺の大小を、いわゆる寺格などへの関心が僧侶にも門徒にも強く動くのだが、こういうものを仏法の衰微といわずして何であろうか。こういう痛みを、というよりも一種の憤懣を、若かった頃の清沢先生は抑えかねた風情があるのです。

五

次第に透徹していく先生の歎異の眼は、やがて明治仏教の全体がその宗教的生命を衰退させ、危機の中に投げ出されていると事態を凝視していくことになるのですが、それを凝集的に「僧風の衰退」として、先生は痛んでおります。先生は、自分はまじめな真宗の僧侶でありたいという意味のことを、繰り返し語られるのでありますが、今の時点でそれを聞き直せば、仏者とか仏弟子でありたいという覚悟の表明であったように思われます。このまじめな仏教者、あるいはまじめな仏弟子でありたいという覚悟を、僧風の衰退という現実の中でもつならば、それは必ずや僧風の刷新という課題となって自覚されてくることとなります。この僧風の刷新として先生が模索していたもの、これをわれわれは多少歴史的な視点から、改めて仏教復興の志願として了解していくことができると思うのです。

ただその時、先生に真宗の現実を僧風の衰退として痛ませ、だからこそ僧風の刷新を繰り返し問わしめた「人生の事」、この一つに宗門改革運動があったことが、思われてきます。仏教の衰退ということは、心ある人であるならば

誰も否定できない事実なのです。多少敏感な心をもった仏教者であれば、なおそれを痛むのです。しかし何故日本仏教は、かくも衰退したのであるか。ある人は、排仏毀釈あるいはキリスト教を精力的に伝道せしめた文明開化というような、社会的打撃のせいだというかも知れない。けれども、そうではないのだ。こう見たのが、先生の透徹した眼であったと思うのです。それについて先生は、二つの原因を指摘します。日本仏教をこれほど衰退させた原因として挙げるべきもの、おそらくそれは、仏教者における「一心の不安立・自行の不確立」、この二つであろうと指摘したのです。

これは『教界時言』の第十五号に載せられた論考の内容なのですが、あの宗門改革運動という大変な努力、政治運動の性格さえ強くもった努力を通して、改めて先生が痛感した日本仏教の衰退をひき起こした原因を、清沢先生はこうとらえていったのです。繰り返して申しますが、明治二十年代―三十年代の真宗教団というものは、当時の日本の最大の教化団体でありまして、あの「教界時言発行の趣旨」の中で先生も述べておられるように、現在のわれわれが感ずるよりも遙かに大きな社会的評価と尊敬と、同時に責任とが感ぜられていた団体であったのです。真宗の僧侶というものは、現在の非常に私的な形になっているイメージで、清沢先生が生きた当時のそれを考えたら少しずれがあるのでして、一村一地域の社会的教化の全体が期待され、託され、当然のこと社会的尊敬と信頼があり、それと共に責任も自負も大きくあったような存在でありました。その真宗が、例えば宗門改革運動の実践を通して見た時、否定することのできない空洞化がさらけ出されてまいります。その白々しい空しさと悲歎の中で、先生は何故このように仏教が衰え、その宗教的生命を枯渇させてくるのかを、改めてしかしながら徹底して問わざるを得なかったのです。その中で先生は、仏教衰退の原因を他に見てはならないと痛感しました。そうではなくて、仏教者といわれる人びとに、一心すなわち信心が確立していないからである。また自行すなわち宗教生活が荒廃しているからである。こう衰退の第一原因を抉り出したのでした。

「仏教者よ、なんぞ自重せざるか」、先生はこう訴えます。仏教者という限り、それは天職すなわち独自の社会的使命をになっている。ところがそれを自重して果たしていくべき仏教者に、肝心の信心が確立していない。のみならずその宗教生活は、宗教生活というに値するほどの実質をもっていない。求道のまじめさは、一体どこにいったのであろうか。この悲歎が、政治的な改革運動の泥にまみれた清沢先生が改めて凝視した、明治仏教衰退の原因だったのです。私たち一人ひとりが、よくよく考えていかなければならない問いかけではないでしょうか。

例えば私たちは親鸞聖人の、次のような和讃を知っています。

弥陀大悲の誓願を
　ふかく信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく
　南無阿弥陀仏をとなうべし

これが念仏者親鸞の宗教生活の、いわば原点でしょう。少くとも法然上人・親鸞聖人の「ただ念仏」の伝統に心ひかれるものを感ずるものであるならば、「ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をとなうべし」、これが自分自身の宗教生活の原点であるべきでしょう。曾我先生がお若い頃お書きになった文章に、こんなのがあります。それは、「夏が来た。夏は思索に大変よい時期である。それで、仏前を浄め香を焚き、閉目開目してお聖教を読もう。そして称名念仏する時、念仏する自分の背後にもう一人の自分がいて、その称名する声を静かに聞いているのが感ぜられる」。私はこの文章を時々思い出して、今日は幸い静かな時間があるから、心ゆくまで念仏しよう、こう思うこともあるのです。しかし実際はどんな状態かといいますと、ちょうど鴨長明が『方丈記』の結びに、「只、かたはらに舌根をやといて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ」と記しておりますが、その程度のことで終ってしまいます。「乃至十念」とあるから、せめて十声の念仏を毎日称えたらどうであろうかと話し合う程度で、とても念仏など語る資格は

ありそうにもありません。そんな念仏など何になるかという意見もあるかも知れません。しかし私は田舎者ですから、宗祖が「ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をとなうべし」とおっしゃったのが念仏者の原点であると了解いたしますので、このことを抜きにして、念仏の仏道を語ることはできないと了解しておりますし、清沢先生が「自行の確立せざるにあり」と仏教衰退の原因を指摘なさったことを思うにつけて、痛まれてくるのです。

それで清沢先生が仏教衰退の原因を、この「一心の不安立、自行の不確立」と抉り出されたのは、社会的なある状況、あるいは時代相応の教学が確立していないから、真宗が衰えるというのではないのだ、ということではないでしょうか。一個の人間として、自分は如来の信ずることがなかったならば、生きていることもできず死んでいくこともできないと、そういう切迫したものをもって如来の教えを求め聞こうとする、その姿勢があるのかないのか、それがわれわれが心して自らに問うべきところではないか。この一事が、先生の指摘しようとしたことであったに違いないと思います。当然のこと、先生にとっての人生の一大事である仏教復興の志願に立っての実践は、誰に求めるよりもまず自分自身にそれを求めていかれました。それがご存知の通り、先生が二十八歳から三十二歳にかけて行われた禁欲生活、いわゆる制欲自誡の生活と理解されている、生きることの最少限を確かめようとした、先生によれば「面白い」実験をなさいました。四年間のこの禁欲生活は、先生によれば面白い実験といわれますけれども、傍から見ればやや無理な生活だったと思いますが、それは先生に肺結核をもたらしました。ここらが人生の厳粛さではないでしょうか。そしてさらに、同じくまじめな仏教者でありたいという願いを、先生が最も深い因縁を感じた宗門に、人間の信念確立の場となるという大きな社会的使命、いわゆる天職を負託されている宗門に期待した時に、宗門の現状見るに堪えずというので、教学中心の宗門を実現すべく改革運動に身を挺していかれました。これによって先生は、大谷派における議会政治の突破口を開いたのですが、この実践は具体的には政治運動の形をとって、宗門内議会政治の主張として展開しましたけれども、その後ご存知のとおり大谷派が同朋会運動を展開して今日に至ったその視点から見

直した時に、先生が模索していたのは、実は今でいう同朋教団の確立という、この志願であったと理解すべきだと思います。

この実践によって、確かに一つの制度として宗門内に議会政治を始めることができましたが、しかしその代償として先生は病気が再び重くなること、あるいは僧籍の剝奪、誹謗擯斥、許多の凌辱などをかち取ることになったのでした。これらはこの運動が先生個人においてかち取ったものですが、宗派においても、先生が改革運動の矛を収めた後も、いく度となく政治絡みの紛争が続いていきます。先生は暗然として、自分が提起した改革運動がこれほど惨憺たる宗門状況をさらけ出していくその状況を見ながら、それこそ暗憺たる思いにせめられておられた感が深うございます。しかしこういう代償を払いながら、痛むべき僧風の衰退の原因は、さっきから申しておりますように、われら仏教者といわれる者の信心の不安立と宗教生活の荒廃と、これ以外にどこにも求めることはできないという自覚を、新たにしていかれたに違いないのです。

その後さらに、いろんな状況が動く中で、浩々洞の精神主義運動と理解されている、一つの信仰運動が展開されていきます。これについては皆さますでによくご承知のとおりですけれども、高山樗牛氏の日蓮主義と並んで、本当の意味で「新しい」信仰運動と評価されるこの精神主義運動は、宗門サイドから見ますと、例えば仏教中のユニテリアン、こういう批判的な烙印も押されもしています。ご存知のようにユニテリアンというのは、処女懐胎も認めない、イエスの死復活も認めないという、非常に合理主義的な立場に立ったキリスト教の一教派です。ですから精神主義などというものは、合理主義的な立場に立った真宗理解だ、こういうことになるのでしょうか。当然、正意の安心というよりも異義に近いという、批判的な眼でも見られることが多かったようであります。

私たちはさまざまなご縁をいただいて、浩々洞の先輩が切り開いて下さったその伝統に触れておりますから、これがどれほど大きな歴史的意義をもつ仏教復興の運動であるか、あるいは真宗開顕の仕事であるかを、よく知ることが

できます。しかしながら、少し立場もしくは視点をずらせますと、大変問題的な信仰運動であるとか、一種の信仰運動であるけれども浄土真宗の正統的な安心といい得るのかというような非難は、清沢先生の生存中から声高に語られていたようです。よく知られている、上野精養軒で仏教徒懇談会が開かれた折の、あの清沢先生のスピーチを思い起こしてみましょう。曾我先生はそれを、こう伝えておいでになります。

我々が精神主義を唱えて、諸方の高教誠に感謝に堪えぬことであるけれども、我々は何等をも主張するのでなく、唯自己の罪悪と無能とを懺悔して、如来の御前にひれ伏す計りである。要は慚愧の表白に外ならぬ。

このスピーチなどから想像してみましても、やはり是非の論が精神主義をめぐって盛んであったのでしょう。

当時、精神主義と並んで、仏教復興運動の一方の旗手であった仏教清徒同志会の境野黄洋氏は、清沢先生の精神主義を評して、「羸弱者の思想」との批判を浴びせております。ですから精神主義は、初めから無条件に賞讃され賛同された信仰運動というわけではなかったのだと、見ておくべきではないかと思うのです。しかしその後よき継承者を得て、日本近代における「新親鸞主義」というか、圧倒的な蓮如上人の名と共にある感化のもとにあった真宗から、親鸞聖人のあの独自の真宗開顕の積極性を掘り起こしていく、その歴史的突破口になったと了解するのです。

六

清沢先生が果たし遂げられた今一つのお仕事、実はこれを今日最初から尋ねていくべきであったのですが、真宗大学を東京に移して、新たな近代の大学を形成して、大学の水準において仏教を学ぶ学場としたい、こういう課題を思いながら再出発せしめる、この仕事でありました。ところが清沢先生がこの大学に託した大きなそして非常にまじめな願いと、それに立っての厳粛な教育方針が、必ずしも学生の理解を得るに至らなかったのです。その結果、発足して一年ほど経った頃、事務の責任者であった関根仁応氏に対する不満という形で、学生のストライキが起こされまし

た。その中心となった一人が、宮谷法含氏でありましたが、宮谷さんは知る人ぞ知る、喧嘩法含という異名をとった人ですが、昭和三十六年のあの親鸞聖人七百回忌の御遠忌を勤められた宗務総長です。私は直接に宮谷さんからお聞きしましたが、あのストライキは一世一代の不覚であったと述懐なさっておりました。その宮谷さんの『追憶記』を見ますと、固いことばかりいってというような不満が記してありまして、「肺病もちの学監の退陣やむなし」、こう書いてありました。なるほどそれは清沢先生も、学生時代にストライキをやった経験がおありですけれども、宮谷法含氏などが中心となって、関根仁応氏排斥、実は清沢先生の厳粛な教育方針に対する反対のストライキを、真宗大学の学生が敢えてしたのです。

しかし、宮谷さんは晩年しばしばこういっておられました。おそらくある時期、大いに懺悔なさったのだと思いますが、もし自分が清沢先生にお遇いすることがなかったならば、自分はとても自信をもち責任を感じながら、真宗の寺の住職など勤めることはできなかった。その自分が、非常に大きな責任と意義とを感じながら、真宗の寺の住職を勤めることができるのは、ひとえに清沢先生にお遇いしたお蔭だと、こう述懐なさっておりましたですね。

このように、真宗大学がたどった道は決して平坦ではありませんでしたが、その真宗大学を開校するに当たって、清沢先生は現在なお「真宗大学開校の辞」としてよく記憶されている、短い挨拶をなさいました。

本学は今日ここに始めて開設したのではなく、元京都にありましたのを此処に移して、校舎のみ新に建築したものであります。その概略は真宗大学要覧に就て御覧下された通りであります。唯だ其大体に就て申し上げまることは、本学は他の学校とは異りまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於て浄土真宗の学場であります。即ち我々が信奉する本願他力の宗義に基きまして、我々に於て最大事件なる自己の信念の確立の上に、其信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。（中略）又其科目に至りては、一派に於ける宗学と及び他の諸宗の教義の学と、最も本学に直接の関係を有する所の須要なる世間の学科

を教授いたします。

これは日本の私立大学の教育理念の上でも、歴史的な意義をもつものであると、私は了解するのですが、ここにいわれている「自信教人信」が、如来の教法に遇うた人に呼び覚まされる志願を表わすものとして善導大師が語られた、非常に意味深い言葉であることは、皆さんのよくご存知のとおりです。さらにこれは親鸞聖人のご了解でいえば、真の仏弟子といわれる人間のあり方を教えられた言葉として、聞きとめられたものであります。その大切な言葉を、そこに「誠を尽くす」という言葉を添えてこの「開校の辞」に清沢先生は語っておられるのです。善導大師の言葉を、親鸞聖人は真の仏弟子のあり方を教えて下さった言葉として聞かれた。それを改めて耳を澄まして聞きながら、その自信教人信の道を誠実に生きていこうとするのであると受けとめ、「自信教人信の誠を尽くすべき人物を養成する」と、開校の時の挨拶で語られたのです。そういたしますと、これをストレートに読めば、浄土真宗の学場であるこの真宗大学で自分が心から願うのは、宗祖親鸞聖人の本願他力の教えによって、真の仏弟子という自重の思いをもった仏者、これが育って欲しいのだ。この願いに尽きるのでしょう。この「真の仏弟子」あるいは「仏者」ということを、どれほど広く積極的に、あるいはどれほど狭く消極的に了解するか、それはわれわれの責任です。決して狭く了解することに安んじてはなりません。

「自信教人信の誠を尽くすべき人物」というこの人間像は、仏教の一つの伝統である真宗という小さな場でだけ意味をもつ、特殊な人間のあり方なのでしょうか。それともそういう人間こそ、まじめに人間と人生を考える人が本当に成りたいと願うべき、広大無辺というか普遍的な意味をもつ人間のあり方をわれわれに問うている言葉であるか、心して把握すべきではありませんでしょうか。多くの研究者が指摘なさっているように、清沢先生が真宗の現実に深く関わった宗門の改革運動は、政治運動という一種の血生臭さをもちました。政治運動に特有の泥まみれの奔走が続きましたが、その厳しい体験を通して、一体真宗の宗門とは何だろうかと、先生は問わざるを得なくなったのです。

私は、蓮如上人以来改めて宗門といわれるものを根本から問うた人、それが清沢先生であったと思います。

早く法然上人・親鸞聖人の時、浄土真宗における和合僧というか僧伽が、専修念仏の輩あるいは御同朋・御同行として顕揚されました。やがて蓮如上人の時、それは本願寺教団として形成されました。それがまた明治の清沢満之において、宗門の改革運動という課題的な実践を通して再び問い直されていったのです。その中から問われた問が、「試みに問う、大谷派なる宗門は何れの処に存するか」、この問い直しでした。それに対してご存知のように、大谷派という宗門は、あの聳え立つ本山の両堂があるところでもなく、寺があるところでも、名だけの僧侶や門徒がいるところにあるわけでもない。「大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する処にあり。あに人員の多寡を問わんや」、こう断言なさったのです。大谷派なる宗教的精神が生き生きと躍動するところに、大谷派という名で呼ばれる生きた宗門があるのだ、こういう宗門観を改革運動の悪戦苦闘を通して、清沢先生は見い出したのです。その大谷派なる宗門を現前せしめる「大谷派なる宗教的精神」、これを今の「開校の辞」で、「我々が信奉する本願他力の宗義に基きまして、我々の人生における最大事件なる自己の信念を確立すると共に、その信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽くすべき人物」といわれる、そのような人物を生み出す精神と自覚的にとらえていかれたのでした。いかにも具体的に浮き彫りにされておりますが、そのような宗教的精神がどのような根源性あるいは普遍性をもつかということは、私たち一人ひとりが自分自身の課題として、よくよく問うべきことに属しているように思います。

おそらくはこういうことを、先生は「人生の事に真面目になる」という言葉で、「我は此の如く如来を信ず」の中で語っていかれたに違いありません。同じことですが、清沢先生の人生、当時の言葉でいえば「霊的奮闘」の人生を一言でいい表わせば、先生自身が「天命に安んじて人事を尽くす」とおっしゃった、そのような人生でありました。そこにもいわれている「人事を尽くす」の人事も、この「人生の事」も、要するにそれは、人生の一大事にほかなりません。人生に紛起する無数の事、例えば先生においても「人情の煩累」という深刻な事件もありますが、そういう

個人の私的な事も無視することはできないのですけれども、もっと厳粛な「仏教者」であろうとしたが故に先生に迫ってきた、これまで申し上げてきたような事柄こそが、先生が「人生の事」というに価した事柄であったことが、思われてなりません。

その人生の事にまじめであろうとして、しかしながら先生は義務・責任の重なり重なる重圧の中でほとんど途方に暮れ、遂には自殺を考えるほかはないところまで追いやられ、自力無功という歎きに突き当たってしまったのです。しかしながら私たちはそこに、決して諦め捨ててはならない先生の願い、もっとはっきりいえば、「命百千ありてもなお足りぬ」仏教復興の志願という、先生の使命感に満ちた悲願をよくよく読み取っていかなくてはならないのです。先生は決して個人の主観性の内に閉じこもった人ではありません。一つの大学を開校するということが、どれほど重い社会的責任の遂行であるか。ましてやあの大宗門の改革運動ということが、どれほど重大な実践であるかを考えれば、思い半ばを過ぎるものがありましょう。その中にあって先生は、「我は此の如く如来を信ず」の中でご存知のように、「如来は私に対する無限の能力である」ということを述べておいでになりますが、それを改めて思うのです。

あれを思いこれを思います時、先生はこの「人生の事」すなわち仏教者としてその身に激しく動く使命感、それを力を尽くして果たしていこうとする努力の中で、疲れ果てていかれた。しかしその疲れをこえて、この大きな使命を敢えて果たし遂げる者でありたい、この志願を担って退転しない者でありたい。こういう願いを強くもっておられたのであろうと思うのです。改めて思うのですが、晩年の先生は「みんな壊れた」と、呟くように洩らしておいでになります。そこには、命百千あってもなお足らないとまで覚悟して事に当たったその努力の全てが崩壊してしまい、言葉でいいようもない白々しい空しさがあるだけでしょう。この意味ある努力の崩壊状況の空しさに堪えながら、先生はなお真宗再興のそして仏教復興の志願を行ずる主体の確立、これを求め求めていかれたのです。この切迫した希求が掘り当てたものが、信念の確立において今更のように自証する、「如来は私に対する無限の能力である」という信

知であったに違いないのです。この「無限の能力」というのは、虚心平気にこの人生に生死せしめる根源的力用ということでしょう。『歎異抄』にいわゆる「無碍の一道」に人を立たしめる、無限の力用ということです。この人生というのは、夢をもつことのできない、この無辺の生死海のことでしょう。仏教復興の悲願を実践し続けた先生にとって、繰り返される困難と挫折と、そして意味ある努力の崩壊する状況という空しさと、それが連続するこの境界です。その中にあって、決して捨ててはならない願いを行ずるべく、自分に立ち上がり実践することを求め、促し、この堪えがたい世界に虚心平気に生死していくことができる。如来はその根源的な力となって私を生かして下さるのだ。こういう響きが、どうも強く響いてくるのです。

その信念の確立にいたる先生の求道の道程を尋ねます時、清沢先生における信念の確立は、明治三十四年十月十八日の『臘扇記』に記された、あの有名な「乗托妙用」の自覚が感得された時ではないかと考えます。先生における回心すなわち信念の確立については、『保養雑記』にある「愚蒙の改悔それかくの如し。穴賢々々」が記された時だとする見解がしばしば語られます。しかし、果たしてそうでしょうか。何故ならば、あの時は先生が「余の三部経」といわれた『阿含経』の読誦もまだなく、『エピクテタス氏教訓書』に接する時もまだ来ていません。その頃の述懐ですから。先生が「余の三部経」といわれた三冊の本を披閲なさったのは、改革運動で疲れ果てた中で『阿含経』を読み、『エピクテタス氏教訓書』を読み、それによって『歎異抄』を読む大きな示唆を得られた、そういう歩みの中でです。

『臘扇記』のあの述懐は、ご存知のように死についての考察というか、死に直面した生の考察から始まっています。先生におけるメメント・モリです。人間が死を想うというのは、先生の場合は改革運動の疲れの中で肺結核のために苦しむその苦しみが倍増し、肉体が衰弱する中で「死ぬるのではないか」との思いに襲われてであったと思います。この文章を読んで改めて気がつくのですが、親鸞聖人が『教行信証』の冒頭に、如来を信ずる心を表白して、

窺かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。

と表白なさっている、その意味するところです。この時、親鸞聖人が「度難度海・破無明闇」という如来の恩徳を確かに自証なさったその場所は、難度海・無明闇と表わすほかはない、苛酷な人生の只中である、つまり「三途勤苦の処」であったという述懐ではないでしょうか。それと同じように、清沢先生は今いったような一種の限界状況の中で苦悶しながら、まるで暗い雲の中にいるようだと呟いておられる風情です。その時先生に迫っていた人生もまた、難度の海であり無明の闇であったに違いない。こういう思いを強くもつのであります。

そのような状況の中にあって、自分がその無明の闇の中に空しい流転の生を生きるか、あるいは虚心平気に生死する無碍道に立つか、それは全く自分自身の責任である。清沢先生はそういうておられるでしょう。如意なるものと不如意なるものとがあるけれども、如意なるものは自己意念の範囲だと。つまりそういう生の惨憺たる状況の中に空しく流転するのも自由、その中にあって無碍道を獲得するのも自由、それは完全に自己の主体の問題であるのだ。こうおっしゃっているに違いないですね。だからこそ先生は、ソクラテスの問いを改めて聞きつつ、「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」と問うたのです。迫って来る死の想念に怯えつつ、しかも無碍道に立つ自己でありたい。この強靱な主体への問いです。その無碍の一道すなわちこの人生に虚心平気に生死するとは、もちろん気儘に生きるということではありません。そうではなくて、日本仏教の歴史が自分に課した、仏教復興の大きな仏事、これを行ずる私でありたい。これを行ずる主体でありたい。そういう、清沢先生における主体の確立を求めて止まない志願の、あるいは祈りの表明であったと、私は了解するのです。

そのように自己における主体の確立を求める先生に、確然として広大な自覚を開いたのが、おそらく『歎異抄』を通して先生が学び取られた二種深信の教えではなかったでしょうか。

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の境遇に落在せるもの、即ちこれなり。

ただそれ絶対無限に乗托す。故に死生の事、また憂うるに足らず。死生なおかつ憂うるに足らず。如何に況んやこれより而下なる事件においてをや。追放可なり、獄牢甘んずべし。誹謗擯斥、許多の凌辱、あに意に介すべきものあらんや。否なこれを意に介すと雖も、これを憂うると雖も、吾人はこれを如何ともする能わざるなり。吾人は寧ろひたすら、絶対無限の吾人に賦与せるものを楽しまんかな。

ここにはっきりと、善導大師が「乗彼願力定得往生」といわれた信知が、乗托妙用の自覚として表白されています。この時おそらく先生にとって、これまで繰り返し尋ねてきたあの「人生の事」は、遊びにも似てきたのではないでしょうか。しかしながらこれを果たしていく時は、もう先生には与えられませんでした。そしてほどなく血を吐きながら命終わっていかれますが、命終わるその最後の時にっこりと笑われたのは、繰り返して申してきたように「人事を尽くした」という、自分に恵まれた大きな満足、しかも謝念に満ちた満足の表明であったに違いないのです。

七

時間がなくなりましたので、最後に一言、真宗大学について申し上げます。清沢先生が真宗大学を東京に開設なさったのは、明治三十四年、一九〇一年でした。それに先立って安政五年、一八五八年に福沢諭吉氏が後に慶応義塾となる学塾を開きました。その慶応義塾は、日本で最も早く開かれた私立大学であるという自負をおもちになっていますし、創立されてから百三―四〇年経っておりますが、なお学祖の精神が生き生きと継承されている大学であるという誇りをおもちのようであります。大いに敬意を表すべきだと思いますが、その慶応義塾で大学を語られる時、それは官学ではなく私学であるという主張があるのでしょう。私学である慶応義塾の面目は、在野精神にある。野にあって、青年の教育にたずさわるのだ。こういう自重の思いが、慶応義塾の学風の基礎にあるようです。こういう学風を思うと、私は大いに我が党の士を得たりという感をもつのですけれども、それに次いで京都で新島襄先生の願いのも

とに開かれたのが、同志社でした。明治八年、一八七五年のことです。新島先生は同志社を開くに当たって、良心の全身に充満した人物を養成したい、こう叫ばれたのですね。いかにもプロテスタントの精神に立った、堂々たる私立大学の建学の精神であるという感銘が、深うございます。

その後、明治十五年に早稲田が開かれます。最初は東京専門学校という名称で開設されたのですが、早稲田大学の学風の基幹をなすものは、有名な「学の独立・学の自由」でしょう。何から独立するかといえば、もちろん官学からでしょう。やはりそこに強く動いているのが、在野精神です。こういう建学の精神が、日本の私立大学の伝統の基本を形成してきていることを思います。

こういう大学のあり方を一方に見、また他の一方で清沢先生は自分の母校である東京大学をご覧になっていたに違いありません。それは日本のアカデミーとして、西欧の文化・技術を積極的に吸収しながら、研究を形成し蓄積しております。そして「学の蘊奥をきわめ、国家有用の人物を養成する」ことを目的として、その歩みを進めております。この二つの大学のあり方を視野に置きながら、清沢先生は「本学は他の学校と異なりまして、宗教学校なること、殊に仏教の中に於て浄土真宗の学場であります」と、高い気慨をこめて語ったのです。在野の精神も、学の独立も、私学の自負も、アカデミーの誇りも、それぞれに非常に大切な大学の精神であろう。しかし真宗大学は、そこに立つのではない。人間に動く求道心というか、菩提心に対する無条件の信頼に立つのです。そして親鸞聖人の本願他力の教えによって仏者が育って下さるようにとの願いに立って、この大学を開くのだと語られたのです。親鸞聖人の本願他力の教えに立つとは、あの群萌の中に身を置いて、そこに御同朋という信仰的自覚に目覚めての人間の「根帯」すなわち根源的連帯を自覚していった、あの聖人の自覚道に立つということです。清沢先生が身をもって求め、そして示して下さったように、信念の確立にまさる一大事は人生にないでしょう。何故かというと、人間は自己に悩み、生きることに苦しむものであるからです。業縁の中にあって、孤独に苦しむものであるからです。そのような人間が、信

仰的自覚によって初めて人間の根源的連帯に目覚め、自分自身の信仰を他に伝え世に捧げる行為によって、それを証ししていく能動性に目覚めていくことができるからです。清沢先生の願われたように、真宗大学における学びが根本的に本願他力の教えに依るものであるならば、偉い人、賢い人、国家有用の人を真宗大学は期待したのではないのでしょう。「いなかの人々」を同朋として生きた聖人のように、黙々として大地を耕す風の人、独立不覇の気慨をもって、しかも野にあって大地を耕す「我行精進　忍終不悔」の人の生まれ出ることを、学祖清沢満之先生は、この大学に学ぶ青年に期待したに違いありません。地球が誕生して以来、この世に幾億人の人が生まれ出たか知りませんけれども、やはりわれらに釈尊あり、われらに親鸞ありという確信は、個人的なものではなくて歴史的なあるいは人類的な意味をもつ信念でしょう。われわれは折角その釈尊と親鸞の精神を、学びの根本所依とするこの大学に学ぶ機会を恵まれているのでありますから、そのことに深く思いをいたして自らの学びを進めていきたいと念ずることでございます。粗雑なことを申したことはお許しをいただきまして、これで終えさせていただきます。

これは、一昨年の六月六日に勤められた大谷大学での臘扇忌において、その記念講演として「真宗の学場への祈願」と題してお話ししたものの記録である。煩雑な講演テープの文章化を担当して下さった有志の方に、心からお礼を申し上げる次第である。

執筆者住所が掲載されているためリポジトリ非公開とする。